パオロ・ウッチェロの《聖餅の奇跡》第 4 場面について

神戸大学 坂本 篤史
SAKAMOTO Atsushi

パオロ・ウッチェロが描いた《聖餅の奇跡》(1467～8 年、ウルビーノ、国立マルケ美術館）は、ウルビーノのコルプス・ドミニ聖堂、主祭壇画のプレデッラとして制作されたものである。プレデッラは 6 つの場面からなり、1290 年にパリで起きた、ユダヤ人による聖餅の冒瀆事件を表している。従来の研究では、典拠や主題選択の理由に関する論考に焦点が当てられ、図像に関するものはほとんどなかった。本発表は、このうち特に第 4 場面に注目し、その図像源泉とモチーフ（中央に描きこまれた立木）について考察するものである。

第 4 場面には、聖餅をユダヤ人に売り渡したキリスト教徒の女性が、絞首刑の直前に、天空から舞い降りてきた天使によって処刑を免れる情景が描かれている。この場面は 1290 年の事件に題材をとったイタリア語版聖史劇からの影響がすでに指摘されている。なぜなら、このテキストにのみキリスト教徒の「絞首刑」と処刑の中止が記されているからである。しかし、テキストでは聖人と天使たちが王の夢に現れ、処刑中止を命じるが、第 4 場面は天使が直接処刑を取りやめている点が異なる。従来の研究において、この点が考察されることはなかったが、発表者はここで、聖ヤコブをはじめとする諸聖人が罪人を絞首刑から救済するという、聖史劇テキストと同系統の奇跡に着目したい。この奇跡を描いた図像において、罪人を救出する聖人の表現方法には、聖人は地面に立っているか、空中から舞い降りてくるかの 2 つに分類することができ、第 4 場面は後者との類似が見られる。そのため、ウッチェロは、プレデッラ制作に際して、テキストではなく、諸聖人の奇跡の図像を着想源にした可能性が考えられる。

しかし、この種の奇跡の図像においては、ほとんどの場合絞首台が描かれるが、第 4 場面では立木が描かれている。実際、典拠であるイタリア語版聖史劇のテキストには「絞首台」と記されている。そのため、モチーフは絞首台から立木へと変更された可能性が考えられる。この理由について、ここでもう一度、1290 年の事件を扱った、イタリア語版、フランス語版聖史劇のテキスト、ならびにジル・コロゼの著書（1586 年刊行）に着目したい。これらのテキストにおいて、聖餅を売り渡した女性はユダと重ねあわされている。さらに、ユダの自殺を表した図像において、多くの場合、彼は立木に首を吊っている点を確認する。これらの点から、この場面に絞首台ではなく立木が描かれたのは、処刑直前のこの女性をユダに見立てるためのひとつの仕掛けであった可能性を指摘する。ユダは当時、裏切り者の代名詞であり、キリストの体である聖餅をユダヤ人に売り渡したキリスト教徒は、弟子でありながらキリストを銀貨 30 枚でユダヤの祭司たちに売り渡したユダと一致するからである。以上のように、本発表によって、従来の研究で顧みられなかった図像上の特徴を指摘したい。